

第2章 事例研究

1. 3年保育3歳児事例

中田 幸江

3歳児 I期 教師と触れ合ったり、好きな遊びをしたりしながら、幼稚園生活に親しみ安定していく時期

1. キーワード

言葉のまねっこ、楽しい体験

2. この事例を選んだ理由

幼児らが言葉のまねっこをすることによって、一人一人が楽しさを感じた事例である。このように一人一人が友達の中で楽しさを感じる体験が友達と一緒にいる楽しさを感じることに繋がると考え、本事例を取り上げた。

3. 事例

事例1 「リボンとったら、どうする？」

5月20日(水)

テラスでO児が泣いているとS児が伝えに来た。O児は頭につけていたリボンをK児にとられたため泣いていた。教師はK児、S児、C児にO児の気持ちに共感してほしいと願い、「あなただったら、どうする？」と尋ねた。その後、教師は「リボンをとったことはよくない」とS児、C児と共にK児に伝えた。すると、K児はO児に「リボンとって、ごめんね」と謝った。

その後、ロフト下にK児、S児、C児、O児がサークルになって座っていた。教師もその場に座った。

C児 「ねこになったら、どうする？」

その言葉のリズムが面白く、さっきまで泣いていたO児がケラケラ笑う。S児も笑っている。

S児 「犬になったら、どうする？」

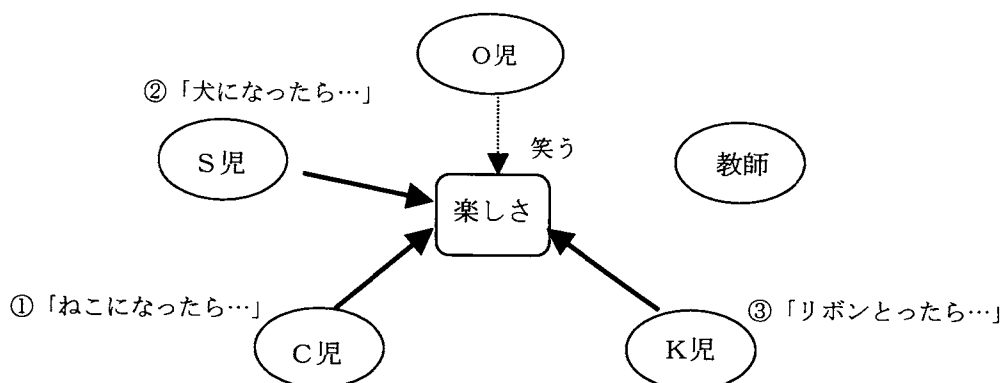
今度はO児、S児、C児、K児らが顔を見合わせて笑った。

K児はみんなの顔をよく見て、

K児 「リボンとったら、どうする？」

とS児と同じ調子で言った。O児、S児、C児、K児、教師は顔を見合わせて大笑いした。K児の表情はすっかり明るくなっていた。

<教師や友達とのかかわり>



4. 考察

(1) この事例からわかる学び

①楽しい体験

教師の言葉「あなただったら、どうする？」に端を発し、言葉遊びが始まった。S児がC児の言葉、口調を真似るとその場に居た幼児らが笑い、楽しい雰囲気その場は満たされた。教師もその楽しさに共感することがその場の楽しい雰囲気をつくり出すことにつながったと思われる。

このようにはじめて出会う環境の中で、友達の中で幼児一人一人が楽しさを感じる体験は友達と一緒にいる楽しさを感じることに繋がると考える。

(2) 環境の構成や教師の援助

①サークルになって座ること

サークルになって座ることは友達の表情や視線に気づかざるを得ない環境となる。幼児の視線はサークル内に集中し、サークル外の世界とは切り離される。だからこそ、そこに集う教師や友達の中で幼児一人一人が楽しさを感じやすい環境だと言える。

②一人一人の思いを聞くこと

教師はリボンを取られ泣いていたO児の気持ちに共感してほしいと願い、他の幼児ら一人一人に「あなただったら、どうする？」と思いをたずねた。この援助によって、教師は「一人一人を大切にしている」というメッセージを幼児らに送った。また、「あなただったら、どうする？」の問いかけが幼児らにインプットされ、言葉のまねっこが始まった。

③言葉のもつ楽しさに共感

幼児らのまねっこする楽しさに共感することが大切な援助だと考える。教師が楽しさに共感することがその場の楽しい雰囲気をつくり出す。さらに言葉のもつ楽しさに共感することで幼児らの言語感覚を育てることにつながるのではないかと考える。

(3) 今後にむけて

今後も幼児一人一人が友達の中で楽しさを感じる体験を大切に考え、援助していきたい。

3歳児 I期 教師と触れ合ったり、好きな遊びをしたりしながら、幼稚園生活に親しみ安定していく時期

1. キーワード

使ってみたい遊具、遊びを楽しむ教師

2. この事例を選んだ理由

T児は年長に兄がおり、入園してからほとんど年長児の遊びに目が向いていた。そのため同年齢の幼児らと遊ぶことはあまりなく、その楽しさを感じる事が少なかったと思われる。

本事例の日は、いつもテラスでヒーローごっこをしていた男児らが砂場へ出かけ、T児にとってテラスはお気に入りの遊具（ジュニアブロック）が思うように使える空間となっていた。そこでT児がお気に入りの遊具を使って自分のペースで遊べるように援助し、T児が教師と共に遊ぶ楽しさを感じた事例である。

3. 事例

事例2 「ぼくもできるよ」

6月23日（火）

T児は遊びが見つけれなくてテラスや保育室を行ったり、来たりして過ごしていた。テラスではO児がジュニアブロックを3つ積んで、それに登り、ジャンプして降りることを楽しんでいて。教師はT児の様子を気にしながら、O児に声をかけた。

教師 「おもしろそう。先生もやってみよう」

と言って、O児が積んだジュニアブロックの隣に同じようにジュニアブロックを3つ積んだ。

教師 「ジャ〜ンプ」

着地してO児と目を合わせると、O児はにっこり微笑んだ。それを見ていたT児は「ぼくもできるよ」と言って、O児と同じように3つジュニアブロックを積んだ。O児と教師が見ている中で、T児は積んだジュニアブロックからジャンプした。

教師 「T児くんもジュニアブロック3つ積んだ所からジャンプできたね」

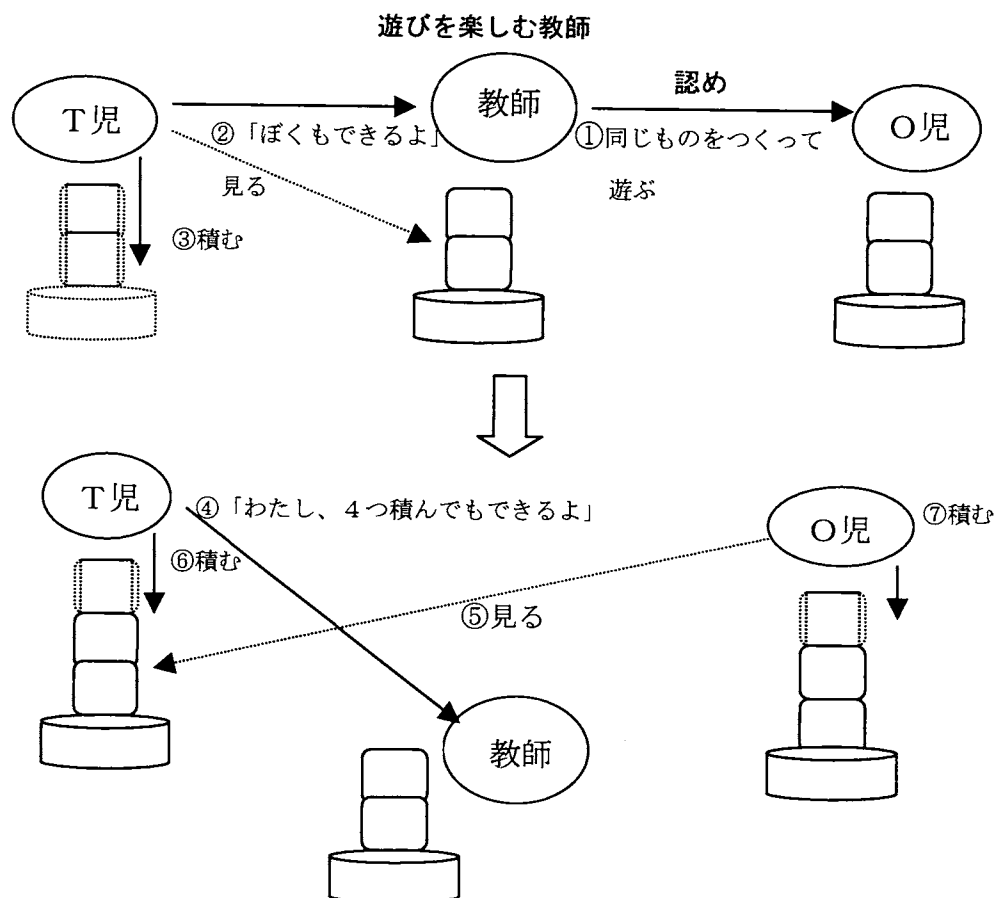
T児は満足そうに「うん」と言った。教師の言葉を聞いてO児は、

O児 「わたし、4つ積んでもできるよ」

と言って、ジュニアブロックを1つ積み上げた。同じようにT児もジュニアブロックを1つ積み上げた。

この後、二人はジュニアブロックを積み上げてはジャンプをしてくり返し遊んだ。

<教師や友達とのかかわり>



4. 考察

(1) この事例からわかる学び

①教師と共に遊ぶ楽しさ

T児はジュニアブロックで遊ぶことが好きである。また、ジュニアブロックを積み上げた所からジャンプすることもT児にとっては魅力的である。このようにT児の好きな遊具で遊ぶ教師の姿がきっかけとなって、T児は積極的に遊び始めた。そして、教師や友達と同じようにブロックを積んだり、ジャンプしたりすることで、教師と共に遊ぶ楽しさを感じたと思われる。

(2) 環境の構成や教師の援助

①自分がお気に入りの遊具とじっくりとかかわれる空間

いつもテラスでは、ヒーローごっこをしている男児らがジュニアブロックで基地や乗り物をつくっている。一方、T児はジュニアブロックを積んで車やバイクなどをつくって楽しんでいる。この日はいつもヒーローごっこをしている男児らがいなかったため、T児にとっては好きな遊具とじっくりとかかわれる空間であった。この時期には、お気に入りの遊具を使って自分のペースで遊べる環境を構成することが大切だと考える。

②教師と同じものがつくれるようなジュニアブロックの数

教師や友達が使っていた遊具（ジュニアブロック）が十分にあったため、T児は教師や友達の行為を真似ることができた。このように教師と共に遊ぶ楽しさを感じるためには、教師と同じ遊びができるよう環境を構成することも大切だと言える。

③共に遊びを楽しむ教師

教師がO児と同じものをつくることは、O児の遊びのおもしろさを認めることにつながった。これは遊びを見つけられずにいたT児にとって、遊び出すきっかけとなった。また、教師が「ジャンプ」と幼児らと遊びを楽しむことで、T児も教師と共に遊ぶ楽しさを感じたのではないかと考える。

④自分のしたことを認めてくれる教師

教師は「T児くんもジュニアブロック3つ積んだ所からジャンプできたね」と、T児が上手くジャンプしたことを認めた。その後、T児は満足そうに「うん」と教師に応答している。このように幼児のしたことを認めることは、幼児がその遊びの楽しさ、遊びに対する満足感を感じることに繋がっていくのではないかと思う。また、これから遊びを展開していく上で大きな励みになると考える。

(3) 今後に向けて

T児は同年齢の友達と遊ぶ楽しさを感じる体験が少ないので、そのような体験が積み重ねられるように今後も援助していきたい。また、T児のようにじっくりものとかかわって遊ぶことが好きな幼児らに対して、環境の構成を考えていく必要がある。

○3歳児 I期 周囲の人や身近な環境への興味や関心を広めながら、生活する楽しさを知って行く時期

1. キーワード

教師や友達のモデル、ものの媒介、楽しい体験

2. この事例を選んだ理由

教師や友達の姿をモデルとして遊びの場をつくった事例である。そこにはあまり言葉を介さずとも、もの（ダンボール）を媒介としながら友達と一緒に遊ぶことを楽しむ幼児の姿があった。

3. 事例

事例3 線路づくり

10月29日(木)

保育室では新幹線の線路ができ、男児らが自分の新幹線を走らせて遊んでいた。I児は紙でつくられた線路の一部を持ち、坂になった線路に見立てた。新幹線を走らせていたL児はI児のやったことの意図がわからず、新幹線を迂回させた。

そこで教師は「I児ちゃん、坂をつくっているのね。おもしろ〜い」と伝え、ダンボールを切った。教師がガムテープでダンボールをくっつけていると、I児は「僕もする」と同じことを始めた。N児はそれに線路を書き出した。その様子を製作コーナーにいたH児はずっと見ていた。

その後、I児は「もう一つダンボール切って」と言った。再度、教師はダンボールを切った。その音を聞いて、製作コーナーにいたH児が近づいてきた。

ダンボールを持ったI児は線路全体を見て、坂をつくる場所を決めた。

教師 「そこにつくるのね」

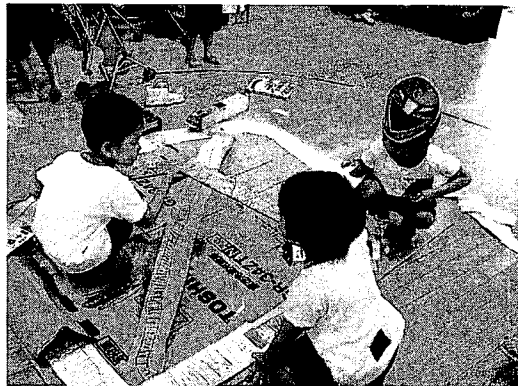
I児 「うん」

すると、H児は自分の側にくっついてきたガムテープをとり、ダンボールをくっつけようとした。I児はH児の手元を見ている。H児は何回もガムテープを切り、ダンボールをくっつけている。I児はダンボールがくっついたことを確かめようとダンボールから手を放した。そして、I児はH児と視線を合わせて、坂ができたことを喜んだ。

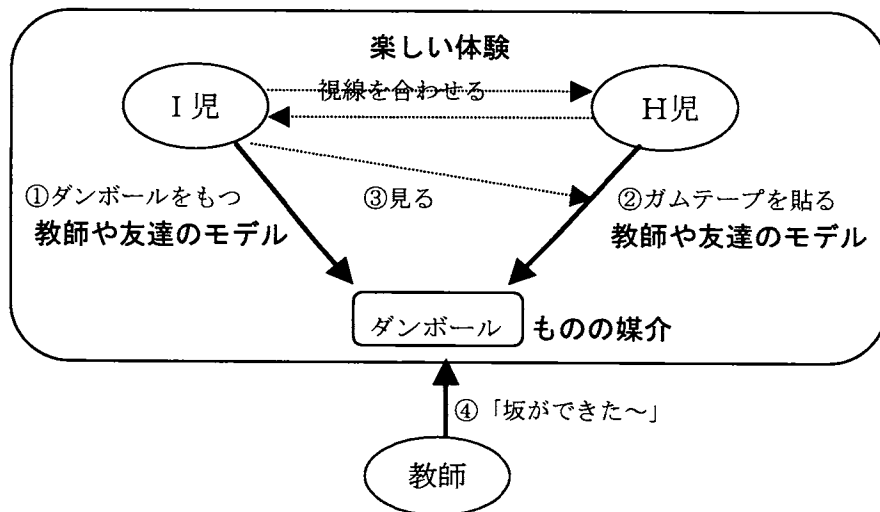
教師 「坂ができた〜。I児ちゃんとH児くんで作ったね」

H児 「あ、反対も」

と言い、H児は反対側もガムテープでしっかりととめた。その後、新幹線の遊びには男児が入れ替わり集まってきて、自分の新幹線を走らせて楽しんだ。



<教師や友達とのかかわり>



4. 考 察

(1) この事例からわかる学び

①遊びの場をつくる楽しさ

ダンボールで坂をつくる体験を通して、遊びの場をつくる楽しさを感じたと思われる。I児は「坂になった線路をつくりたい」と思い、紙の線路をずっと持ち上げていた。その時に教師がI児の思いに寄り添い、適切な素材を提示することによりI児は遊びの場をつくる楽しさを感じたと考える。

②友達と一緒に遊ぶ楽しさ

H児はI児の行動を気にし、よく見ている。また、かかわりも多い。従ってH児は製作コーナーで自分の新幹線を修理しながら、教師とI児の姿をずっと見ていた。気になるI児が楽しそうにダンボールで坂をつくっていたため、自分もその遊びに参加したくなった。そして、一緒にそれをつくることを通して、友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じたと考える。

(2) 環境の構成や教師の援助

①友達の遊びが見える空間の構成

製作コーナーと新幹線の遊びの場が適切な距離にあり、互いの遊びが感じられる空間となっていた。このような環境の構成だったため、H児はI児の遊びを見て、その楽しさを感じたと考える。

②幼児の願いに寄り添った素材の提示

「坂になった線路をつくりたい」という幼児の願いを行動から読み取り、適切な素材（ダンボール）を提示することが大切である。

③素材を扱うモデル

幼児らにとってダンボールで製作をするのは初めてだった。そのため、「どのようにそれを使って坂をつくるのか」を教師がモデルとなって示すことで、「幼児は自分もつくってみたい」と思ったのだと考える。

④嬉しさに共感

I児、H児は同じものを一緒につくることを通して、できあがった嬉しさを視線をかわし合って伝えている。そのうれしさに教師が共感することで、友達と一緒に遊ぶことが楽しいとより感じられたのではないかと思う。

(3) 今後にむけて

今後も幼児一人一人が友達の中で楽しさを感じる体験を大切に考え、援助していきたい。

○3歳児 Ⅱ期 周囲の人や身近な環境への興味や関心を広めながら、生活する楽しさを知って行く時期

1. キーワード

思いを伝える

2. この事例を選んだ理由

幼児が同じ場所で砂遊びをしていた友達と一緒に水を運んだ事例である。まず、幼児は教師に「水がない」と訴えてきた。しかし、教師が同じ場で遊んでいる友達と運ぶよう促すと「一緒にお水、持ってこよう」と自分の思いを伝えることができた。この時期には語彙も増え、本事例のように言葉で思いを友達に伝えようとするようになる。このような姿が見られたため、この事例を取り上げた。

3. 事 例

事例4 「Y児く～ん、一緒にお水、持ってこよう」

3月2日（火）

砂場の近くで女兒らとままごとをしていた教師にM児が近づいてきた。

M児 「先生、お水がないんだよ」

いつも水が入っていた容器に水がないようだ。

教師 「汲んでくればいじゃない」

M児 「だって…M児だけじゃできないの！！」

教師 「そうだよね、M児ちゃん一人ではお水は持って来れないわよね。でも、先生はお料理しているからお手伝いできないな」

お団子をつくっていた手を見せながら言った。すると、M児は困った表情でうつむいてしまった。

教師 「どうしたらいいのかな…」

とつぶやき、M児を見た。相変わらずうつむいたままである。教師から水を汲みに行ったY児の姿が見えた。プリンカップを持ったY児は「あれっ」というような表情をし、水がないことに気づいたようだった。

教師 「ね、M児ちゃん見て。Y児くんもお水使いたいみたいよ」

M児はY児の方を見た。

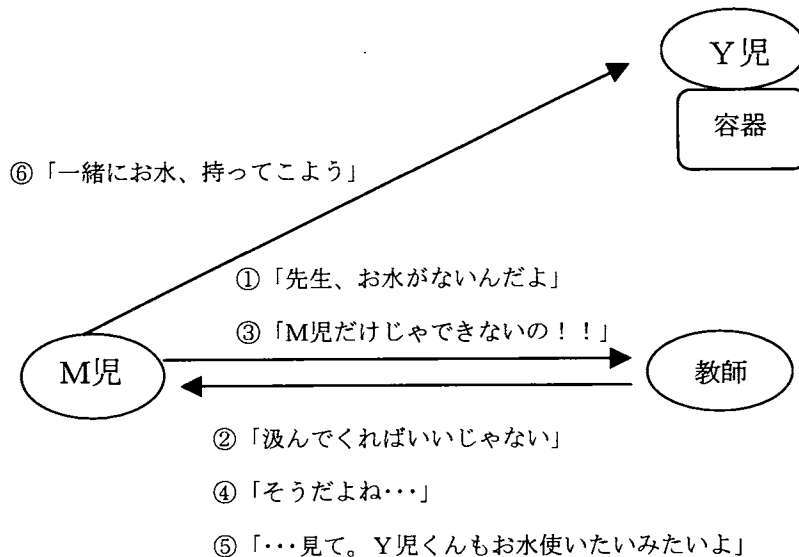
M児 「そうだ！Y児くんと一緒にお水持ってこよう」

教師 「いいかもしれないね。お願いしてみたら？」

M児 「うん！Y児く～ん、一緒にお水、持ってこよう」

M児はY児の方へ駆けていった。その後、二人で水が入った容れ物をもって歩く姿が見られた。

<教師や友達とのかかわり>



4. 考 察

(1) この事例からわかる学び

①思いが伝わる嬉しさ

この時期になると幼児の語彙が増えるとともに、友達とかかわって遊びたいという思いが強くなってくる。しかし、どのようにかかわればよいのか戸惑ったり、かかわりのない友達には躊躇したりする姿が見られる。本事例は教師を仲立ちとしながら、M児がこれまでかかわったことがない友達に自分の思いを伝えることができた。「水を汲みたい」というM児、Y児の思いが一致し、友達と水を汲んだことは楽しい体験となったと思われる。

(2) 環境の構成や教師の援助

①一人では持つことができない大きさの容器

いつも水が入っている容器は幼児一人では持つことができないものである。さらに水を入れると、水の重さも加わってなおのこと、幼児一人で持つことはできなくなる。このような容器だったからこそ、友達と力を合わせる状況が作りだされたと思われる。また、M児がこれまでに友達と牛乳を運んだり、畳をかたづけたりした体験から、友達と力を合わせるということに考えが及んだと考える。

②水道の蛇口の場所と容器の置き場所の距離

本園の水道の蛇口の場所といつも容器の置いてある場所はかなり離れている。このように幼児にとって2つの位置が離れていたため、「自分一人では水を運べない。だから誰かと運ぼう」という考えにつながったと思われる。

③友達とつなげる援助

M児とY児はほとんどかかわりがない。したがって、「水を汲みたい」と思っているY児の表情を読み取り、M児にY児の思いを知らせることは二人をつなげることとなった。このような援助は幼児らのかかわりを広げていくうえで欠かせない。

(3) 今後にむけて

今後も幼児が教師を仲立ちとして、友達に思いを伝えながら一緒に遊ぶ楽しさを感じたり、やりとげる楽しさを味わえるように援助していきたい。



<一年をふりかえって>

1. 協同して遊ぶ姿における学びについて

(1) 教師と共に遊ぶ楽しさ

3歳児にとって園生活は、初めての集団生活である。幼児は信頼を寄せた保護者から離れ、大きな不安を抱えて登園してくる。このような幼児の中には教師と一緒に遊ぶ楽しさを体験することで少しずつ自分の居場所を確保し、園生活を楽しむ幼児もいると思われる。

事例1では教師の言葉に端を発した言葉遊びは、幼児らの心を解放し、その場にいる幼児一人一人に楽しい雰囲気を感じさせることにつながった。

事例2では教師と一緒に遊んでいたため、T児は普段はあまり使うことができない遊具をじっくり使うことができた。そして教師と共に遊ぶ楽しさを学んだ。

(2) 教師や友達と一緒に遊ぶ楽しさ

Ⅱ期になると幼児らは園生活にも慣れ、次第に身近な環境や人への興味を広めていく。それはⅠ期で学んだ教師と一緒に遊ぶ楽しさを基盤として、周りに目が向くようになってくるからである。友達が楽しそうにしている遊びの場に自分も加わりたい、同じものをつくってみたいという思いがはっきりしてくる。そのような思いに動かされ、教師だけではなく友達と一緒に遊ぶ楽しさをも学んでいくと考えられる。

事例3では、H児はいつも同じ場で遊んでいる友達のやっていることに興味をもち、自分もやってみたいと思った。そして、遊びの場に加わって友達と一緒に遊びの場をつくる楽しさを学んだ。また、M児にしても「水を使いたい」という自分の思いを友達に伝え、友達と一緒に水を汲みにいくことができた。このように教師や友達と一緒に遊ぶ楽しさをも学んでいっていると思われる。

2. 環境の構成と教師の援助について

(1) 環境の構成

①安心して遊ぶことができる場

特にⅠ期では幼児が安心していられる場とは、教師がいる場である。教師がいるからこそ、幼児は安心して好きな遊具にじっくりかかわって遊ぶことができる。そして、その遊具を媒介としながら友達とのかかわりも生まれやすい。

②友達と同じものがつくれる遊具の数

幼児は友達のしていることを見て、真似ながら身近な環境を知覚していく。このように真似するには同じものがつくれるだけの遊具の数が必要だと考えられる。

③友達の遊びが見える空間の構成

友達のしていることが見えるには、友達の遊びが見える空間の構成が必要である。遊びのコーナーとコーナーが幼児の把握できる距離にあることが大切になってくる。

④一人では持つことができないもの

友達とのかかわりを生むためには、一人で持つことができないものが有効であることがわかった。

(2) 教師の援助

①遊びの楽しさへの共感

教師が幼児の遊びの楽しさに共感することはとても大切である。事例1では言葉遊びを楽しむ教師の姿が遊びを楽しむモデルとなっている。その姿から幼児らも楽しさを感じることになった。さらに事例2では、教師が幼児と同じものをつくって遊びを楽しむことは、幼児の遊びを認めることとなった。それは周りの幼児に対して遊びそのもののおもしろさや楽しさを伝えることにもなり、幼児らのかかわりを促す援助にもなる。

②友達とつなげる援助

幼児は、自分の思いを次第に言葉で伝えるようになってくる。しかし、その相手は教師であることも多い。そこで教師がその思いを受け止めながらも、自然に幼児ら同士のかかわりが生まれるように友達の思いに気づかせる援助が必要となってくる。

3. 今後に向けて

Ⅱ期になって幼児らは園生活に慣れ、安心して生活できるようになってきている。今後、その安心感を基盤としながら自分の思いを表現し、教師や友達に伝えながら共に遊ぶ楽しさをもっと味わってほしいと願っている。